



2012・4

SORA 42号

束の間

柴田 佐知子

鷹の樹のぬきんでて山暮れにけり

竹山に竹のさざなみ年用意

悪人の声よく通る初芝居

煮凝に一夜の闇の詰まりをり

狐畏かけて狐のやうに去る

百歳に間のある父母や蕪蒸し

楽しくてならぬ子猫のはじけ合ふ

名が付いて賢くなりし子猫かな

考へてゐたる雛も流されし

天上を見しは束の間流し雛
―「俳壇」三月号より―

初湯出て母ももいろに笑ひけり

人よりも神あまたなり山始

矢のやうな筈が返る櫟の芽

如月の仰臥を火山帯の上

田楽や雲一朵なき阿蘇寝釈迦

一枚に春日延べたる草千里

あたたかや阿蘇のうねりに牛消えて

押し合へる形あらはに蓬餅

雛よりも小さき牛車の控へをり

働かず死せず雛はまた闇へ

流し雛たちまち水に畳まるる

春の夢

高倉和子

川幅に余る光や雛祭

雛壇の後ろあつさりしてみたり

春耕の一人をまたも神隠し

ごろごろと岩を置きたる春の川

残り鴨人に汚れてゆきにけり

本堂の屋根突きささる春の山

春の夢大切なことはぬまま

山頂に近き畑の朧かな

杉 箸

中田みなみ

渡舟わたしより降りて葛飾別れ霜

足湯してうしろ春めく牛のこゑ

風光る産みたて卵一ダース

鳥曇りビルに囲まれゐる不安

花ざかり海のかもめが川に來し

流木を曳き陽炎の丈伸ばす

さくら守今年も同じ樹齡言ふ

花の下杉箸割るもありがたく

微 熱 荒井千佐代

あるがままとは七曜を着ぶくれて

ちちははよ被爆川にも水草生ふ

龍天に登り支那海真つ平ら

死なば吾の遺品となさむ春銀河

湾占めて停泊船や涅槃吹

出漁の船に灯の入る桜かな

夕桜止めしバイクに微熱あり

薔薇の坂神父様より三步あと

噓 服部早曲

噓して潮入池の水位減る

揺れてゐるやうにも見えて枯木星

笑ひ声耳にのこりし初電話

葛湯吹き湯気の時空に遊びけり

冬の雨尾灯にじみつつ流る

寒林に朱色散らして落日す

紙漉くを覗くはうしろめたきかな

節分の鬼は青年消防士

如月 柴田志津子

有耶無耶 だいじみどり

明け方の有線放送御慶より

気付かれず気付かぬ振りのマスクかな

人来ねばつねのしづけさお元日

帳ちようづら面を合はせて仕舞ふ彼岸寺

鬼すべや氏子に貰ふ藁の角

有耶無耶へ返すうやむや春の雪

大仏の下如月の地獄変

恋の猫蛇口の水を舐めてをる

壁泉の音に紛るる百千鳥

落椿風にころがる気配なし

横目して走る雄鷄路の臺

初舞の君の襟足ばかり見て

箸使ひ上手に出来て雛まつり

三人寄ればお雛さま其方退け

春宵の路地生粋の博多弁

廁までぐるりと遠し寒葵

糸田 宮井知英

草を出し雉の尾羽は天を指す
芽吹山猪のぬた場を懐に
月光の通り抜けたる薄氷
血刀を洗ひし川も温みけり
花白し鎮守の闇に取り巻かれ

福岡 矢野百合子

替へし鸞握れば情の湧きはじむ
くれるなら一りんが良し冬の薔薇
街灯がしきりに雪を降らしをり
臘梅の日ざしこぼるる膝頭
詳細は坊主に問へと亀鳴けり

福岡 田代貞枝

千の手を飛び越えていく福の豆
畝立てて憩ふ春立つ日と思ふ
囀の庭に虎刈されしこと
病棟の夫眠りしか冬銀河
春立つや鳶職が空往き交ひて

須恵 苑 実耶

ちやんちやんこ付けて小犬の貰はるる
紅梅や全き空に言ふことなし
あたたかや鶏押し退けて卵取る
逢ひたくて桜前線越えにけり
肩書はすべて返上風光る

糸島 小林朱夏

鳥渡る自己紹介に病歴も

カーテンで仕切る病室春の闇

花曇り幾度も触るる手術跡

病院の屋上庭園種を蒔く

退院し芽吹く我が家にたぢろぎぬ

福岡 あさなが捷

統制のとれし行進春浅し

如月や思ひどほりにならぬ夫

縮むだけ縮んで伸びる子猫かな

総身に光まとへる桜鯛

入口も出口も混みて花の山

熊本 松田明子

檻にゐて鷺の矜持を失はず

あたゝかや檻の隅まで猿駈けて

足の裏見せたる河馬の日向ぼこ

ふくろふの首なき首を回しけり

梅ふふむ父の忌日を待ちかねて

福岡 亀井紀子

鬼すべや親子三代藁の角

鬼すべの闇を撥きし炎ほむらかな

ねむりゆく母のてのひら白障子

寒梅と坐禅のごとく向き合へり

畏くも雀合戦の寝釈迦かな

大阪 田岡千章

自販機の真夜は唸りに寒九郎
校歌つと声になりけり建国日
自販機の命令口調冴返る
愛のチョコなどと戦前生れです
自販機に札戻さるる余寒かな

粕屋 秋 千晴

霜柱踏まるる前に解け始む
山を焼く煙の中に女ごゑ
黒髪を整へて雛飾りけり
春潮の脈乱したる七ツ釜
春風や麒麟の首は空の中

粕屋 吉田 菫

ビックバンの音聞いてゐる海鼠かな
鳩のやうな女の笑ひ初みくじ
大男正座してゐる福笑
きさらぎや歯を押し戻す京生麩
冬の朝母の帯締きゆと鳴りぬ

長崎 鳳 蛮華

人混みを立つて流るる破魔矢かな
女手に水はふるさと寒くりや
後悔の果ての坤吟すき間風
冬深し口の詰まりし醬油差し
春立つや遺児の催す遺作展

千葉 原 友子

口開けの味噌の飴色冬はじめ
朝市や蒔蓀草の根が真つ紅
雪嶺や静寂の的の池ひとつ
遠山は母のまなざし春田打ち
脚太し短かすと愛で春子かな

福岡 栗原京子

初暦世界の美女がこちら見て
君とゐる時間はこはき春の闇
潮騒や龍の都の紅つばき
初鏡目鼻口あり肯ずる
生きて世に雑煮拵ふ幾度も

東京 山田正子

回転木馬春へ春へと回るなり
せせらぎの水に戻りし春の雪
鯿食ぶ肩に鱗をつけしまま
打ち明けるその後の話桜餅
浅草の老いし踊り子春の霜

福岡 吉村摂護

立つ稽古重ねし一步文化の日
太陽の昇る窓開け春を待つ
博多湾吹雪の波の打ち寄する
拳骨の出来ぬ両手を打つ霰
爪切りも他人に托し日脚伸ぶ

・「空新人賞」受賞作品・

吉田 菫



夏芝居奈落より首抱いて来る

古戦場の地図は大まか麦畑

俊寛をこれ乗せてゆけ薪能

雄鶏の仁王立ちする蟻の道

頭を入れてすぐ胴入るる蚊帳かな

夏の川越ゆれば街の蠢ける

内親王の恋露はるる曝書かな

蝉捕りや式神混じる夕社

花火奉行バケツいつぱい水を張る

走馬燈かげわらわらと席に着き

抽象の男具象の女秋深し

母親に男の子は優し芋名月

鹿の声女院は紅を捨て給ふ

名月のとどまつてゐる葬の家

新米を炊く間の在五が物語

金柑や兄は喧嘩に負けて来し

無花果の汁すきとほる母郷かな

曲がるとき雪駄の揃ふ秋祭

祭馬止まるスクランブル交差点

赤ん坊に鉢巻食ひ込む秋祭

荒鷺の助走してをり鎖ごと

甕棺の朱の滲みたる蜜柑畑

宝恵駕や芸伎の蹴出しまづ降りる

右左ブーツの倒れ葉喰ひ

鶴来たる着地の羽を真つ直ぐに

寒卵生きたる者の手の赫き

熾り炭芯までぬくし母の文字

おちよぼ口して公魚の釣られたり

囀りや女ばかりの楽団員

寝仏の胸焦がしゆく山火かな

・「空新人賞」受賞作品・

亀井紀子



雪吊や松にしたがふ男たち

初湯してさらに男と女かな

大陸の風も交はる玉せせり

水鳥の遊びきつたるお濠かな

マフラーで絞める恋などしてみたし

やさしさにつつまれてゐる風邪の床

柁を挿し家系図の裾に居り

バスの便減りゆく町よ寒雀

料峭や葉で眠る夜もあり

母校の名大きく歌ひ卒業す

歳時記の死語と向き合ふ遅日かな

鐘の音のしだれ桜に納まれり

忘れゆく母をなだめて春の月

身の丈の餌も運び来る燕かな

千代紙の青に置くなり桜員

斑猫や神と呼ばれし人の墓

走りゆく馬も仔牛も虹の中

飲み干して片目でのぞくラムネ玉

見習ひのほどよき距離よ三尺寝

好きな色みんな集めし水中花

夜店なり太宰・三島が五十円

まづ鳩がくぐり抜けたる茅の輪かな

台風の的となりけり熊野杉

のぞかれてかしこまりたる芋の露

賑はひを過ぎれば秋の簾かな

サンドイッチに脚をかけたる秋の蠅

前掛けの中にあふるる母の柿

新豆腐一匙一匙の齢かな

無月かな女の後にまめ男

紅奪ひ尽し廃寺の曼珠沙華